註六　前出。

註七　前出。

（三八）吾々の擧動態度の奇妙な癖は交際の妨げとなるものであるから避けなければならぬ。アレキサンドルの執事デモフォン Demophon は日蔭で汗をかき、日なたで慄へたと云ふことであるが、誰か其の奇體な性分に驚かないものがあらう。又昔者ゲルマニクス[註一] Germanicus は鷄を見ることも、其の鳴くのを聽くことも出來なかつたと傳へられる。私の知つて居る人々の中にも林檎の香を彈藥の臭ひ以上に厭ふものがある。鼠を見て仰天するものがある。又或ひは乳酪を見て、或ひは羽蒲團の動くのを見て嘔吐を催すものがある。恐らく此等の奇癖は何等かの隱れた身體の狀態に起因するものであらうが、幼少の時から注意したならば矯正出來ぬことはあるまいと思ふ。私の教育は成る程余程注意の行き屆いたものであつたが、其の結果として私は食卓へ出されるものはビール以外は何でもかでも食べられるやうになつた。

註一　Caesar Germanicus(15B.C.—19A.D.) ローマの勇將。北方の蠻族ゲルマニの亂を鎭定した爲にゲルマニクスと尊稱せられた。

（三九）　此時期に於いては身體は尙柔軟である。夫れ故に吾々は彼れを有らゆる生活法並に習慣に慣らさなければならぬ。而して其の欲情や意志が尙吾々の自由になる間に、若者を凡ての國民、凡ての社會に(而して必要な場合には放縱不羈のものにさへも)適合するやうに鍛へなければならぬ。彼れは世間の習慣に從つて生活すべきである。彼は何でも出來なければならぬ。然し乍ら善事のみを喜んで爲すやうにあらねばならぬ。カリステネス Calisthenes が彼の主、アレキサンドル大王と酒の呑み競べをすることを好まなかつた爲に、其の寵を失ふたのは哲學者さへ賞讃せぬ所である。吾々の敎へ子は其主君と共に笑ひ、馬鹿な眞似も爲し、時には放蕩さへ爲なければならない。彼は放逸に於いても、其の元氣と確かさの點で、彼れの同輩を凌駕するやうにあり度い。而して惡い事は自分が出來ない、或は識らないから爲ないと云ふのでなくて、それを欲しない故に爲ないと云ふのであり度い。Multum interest, utrum peccare quis nolit, aut nesciat.（註一）（惡を欲せざるか或は是れを爲

す能はざるかは大なる相違である)。私は曾て佛蘭西に於ける立派な紳士で斯う云ふ放逸から全く遠ざかつて居る人に向つて、貴方は獨逸に居た頃、王樣の用件の必要上から酩酊に及んだ事が何度位ありますかと、或る席上で尋ねたことがあるが、私は此質問に依つて其人に敬意を表した積りであつた。其紳士は此質問を全く私の意味した如くに解釋して、それは三度あつたと答へて、尙其折の事共を私に語つて聞かせて呉れた。私は又、かう云ふ能力を有たない爲に、此國民との交際に於いて大いに當惑を感じた人々を知つて居る。格別健康を損ずることなくして容易に樣々の生活法に順應することの出來たアルキビアデス Alcibiades の其の驚くべき性質に對して私は屢々感心せざるを得ない。彼は時に贅澤華美に於いてペルシア人に勝り、時に又嚴肅と儉素に於いてラセドモニア人を凌いだ。彼はイオニアに於いて放縱なりし如く、スパルタに於いては嚴肅であつた。

註二

Omnis Aristippum decuit color, et status, et res.

アリスチッポスは凡ての境遇、凡ての運命に自身を順應させた。

斯う云ふ人間に私の敎へ子を形成し度いと私は思ふ。

Quem duprici panno patientia valet
Mirabor, vitæ via si conversa decebit,
Personamque feret non inconcinnus utramque.[註三]

權樓に恥ぢず、幸福に驚かず、恰然として二つの役目を演ずる其人を私は賞讃する。

註一

Seneca—Epistolae, 90.

註二

Horatius—Epistolae, I. 17. 25.

註三

Horatius—Epistolae, I. 17. 25.

（四〇）此の如きものが私の教說である。此れを實行するものは此れを知るものよりも一層多くの利益を得る。若し貴方が私の教へ子を見るならば、彼の語るを聽け。彼の語るを聽くならば、彼を見よ。「恐らく哲學（フィロソフィー）するとは多くの事柄を學び之れを實行することである」とプラトーンの中で誰かゞ云つて居る。Hanc amplissimam omnium artium bene vivendi disciplinam, vita magis quam litteris persequuti sunt.[註一] （凡ての藝術中の最高の藝術、善く生くるの術をば、彼等は學問に於いてよりも、寧ろ生活に於いて求めた）。フリアジアの君主レオン Leon がくラクリデス・ポンチコス Heraclides

Ponticus に如何なる學問、如何なる技術を職業とするかと尋ねた時、「私は學問も技術も知らない、然し私は哲學者である」と彼れが答へた。[註二] 人々はディオゲネス Diogenes[註三] に向つて、彼は無知であるのに、どうして哲學を云々することが出來るかと云つて、彼れを批難した時、「それだからそれ丈哲學の效能が多いのだ」と彼が云つた。ヘゲシアス Hegesias が彼れに何かを讀んで呉れと賴んだ。彼が答へた「御前は妙な男だ。御前は繪にかいた無花果よりも本當の無花果の方がよからうが。それならば何故自然な本當の實行の方を選ばないで、書いたものを選ぶのか」と。[註四]

註

註一 Cicero—Tusculum, IV. 3.

註二 Cicero—Tusculum, V. 3.

註三 ギリシヤの犬儒派のディオゲネス。

註四 Diogenes Laertes—VI. 48.

（四一）私の敎へ子は其の學べる所をたゞ口さきで鸚鵡返しをしないであらう。彼は寧ろ是れを其の實行に於いて反覆するであらう。彼は其の企圖に於いて、彼が思慮を

有するや否やを、彼の擧動に於いて仁義の心の有無を、其の談話に於いて判斷と氣品の如何を、彼の病氣に於いて體力の如何を、遊戯に於いて彼が謙讓なりや否やを、其の激情に於いて節制の有無を、其の家政に於いて彼が秩序を愛するや否やを、其の嗜好に於いて魚肉と獸肉と酒と水とを敢て問はないかどうかを、qui disciplinam suam non ostentationem scientiae, sed legem vitae putat; quique obtemperet ipse sibi, et decretis pareat (註一) (彼れの學問が其の博學を誇る爲ではなく、彼の行爲を規正する爲に役立つか、彼は自己自身に命令し、之れに服從するかどうかを)示すであらう。吾々の言說の眞實の鏡は吾々の生の流動である(Le vray miroir de nos discours est le cours de nos vies.)。或る人がッェウキシダマス Zeuxidamas に、何故ラセドモンの人々は勇氣の格率を編纂して、之れを青年に讀まさないのかと尋ねた時、彼れは答へた――彼等は青年を實行に習熟せしめんと欲するのであつて、言葉に習熟せしめんと欲するのではないと。(註二) これを單に言語を學ぶ爲に十五、六年の歲月を費した所のラテン語學生と比較せよ。今や世人はたゞ饒舌するのみ。必要の程度以下よりも寧ろ其れ以上を話さない者は一人だつてありはしない。而も人生の半分は學校で費されてしま

うのである。五個年、六個年は言葉を學び、之れを成句(クローズ)に綴る練習を強ひられる。同様に又四個年は四つ五つの部分から大きい全體を適當に集綴することを學ばねばならぬ。而して更に少くとも五個年は是れをうまい具合に簡潔に混合し、組み立てることを學ばねばならない。こんな事は明らかに之れを職業とする者に任せて置けばよい。

註一　Cicero—Tuscul. II. 4.

註二　Plutarch—Apophthegm.

（四二）私は一日オルレアンへ旅行した時、クルソーの此方側の平原で二人の學校教師に逢うた。彼等はボルドーの方へ行かうとして、五十歩許り離れ離れに歩いて居た。彼等の遙か後ろに一つの隊列が、隊長を先頭にしてやつて來た。此隊長は故ラ・ロシュフコー伯 la comte de La Rochefoucault であつた。私の連中の一人が、先きに居る學校教師に、彼の後ろにやつて來る貴人(ジャンチロンム)は誰であるかと尋ねた。彼は其の後ろに來る一隊を見なかつたから、彼の伴侶の事を云つて居るのだと信じて「ありや別に貴人(ジャンチロンム)ぢやありません。私は文法家(グラマリアン)であれは論理家(ロジシアン)です」と答へた。今吾々は一個

の文法家や一個の論理家を作らうとするのではなく、實に一個の貴人(紳士)を作らうとするのであるから、彼等をして勝手に彼等の閑暇をつぶさすがよい。吾々は他にやる事がある。吾々の敎へ子は事物の知識を充分に供給せられねばならぬ。言葉は自然に後から蹤いて來る。縱令言葉の方で御供すまいとしても、彼は是れを引きづり出すことが出來る。何う云ひ現はしていゝか解らないと云ふ樣な云ひ譯をして、頭腦の中には色々いゝ考が一杯になつて居るが、雄辯の持ち合せが無い爲に、是れを明瞭に示すことが出來ないと云ふやうな顏付をする人々を私は知つて居る。

此れは子供瞞しに過ぎない。私の意見に從つて、其の裏に何が潛んで居るかを見よ。其れは彼等自身の內部でも解明し得ないから從つて又外部にも表現出來ない所の混亂せる觀念群に基づく暗黑である。其れは彼等自身にも解らないのである。其處で彼等は吃つて、恰も分娩せんとするかの如き樣子をする。而も其胎兒は尙未熟で、やつと受胎した許りなのである。彼等は其の受取つた、不完全な素材を其儘他人に舐めさせるのである。私は信ずる——又ソクラテスが是れを裏書きして居る——精神の中に生き生きした明瞭な觀念を有つて居る者は必ず是れを表現す

る。縱令彼が啞であつても、眼付顏付が是れを語る。

Verbaque praevisam rem non invita sequentur,[註一]

汝が汝の趣旨を捉へる時、言葉は自ら從ふ。

又他の者は其の散文に於いて同じく詩的に云ふ——quum res animum occupavere, verba ambiunt,[註二] (或る事柄が精神を充たす時、言葉は其處に溢れ出る)。又他の者は云ふ——ispsae res verba rapiunt.[註三] (事柄其ものが自ら言葉を引き出す)。吾々の敎へ子は第六格(アブラチフ)も接續法(コンユンクチフ)も名詞(シユブスタンチフ)も乃至は一般に文法なるものを知らない。而も彼は彼の從僕やプチ・ポン Petit Pont の漁婦の樣な言葉は使はない。若し彼方が進んで熱心に傾聽する積りならば、彼は立派に話す。而して恐らくは佛蘭西第一流の先生と同樣、時に言語の規則に違反することもあるだらう。彼は修辭學も知らなければ、緒言に於いて「誠實なる讀者諸君」の厚意に媚びることも知らない。そんな事は彼の關知する所ではない。實際の所、艶麗を極めた修飾は單純な素朴な眞理の光輝の前に容易に消え失せる。婉曲な修辭はタシート Tacitus[註四]に於けるアーフェル[註五] Afer が明らかに示して居る樣に、一層濃厚な實質的な食物の味の解らない俗衆を喜ばすに過ぎない。サモス Samos の使節達がスパルタ王クレオメネス Cleomenes の許に來た

時、彼等は僭主ポリクラテス Policrates に對する戰爭を王に慫慂する爲に、凝つた長い演說を用意して居た。王は彼等に充分喋らせた後答へて曰く「貴公等の冒頭や始まりの文句は忘れてしまつた、從つて眞中や結論は思ひ出せない[註六]」と。私は思ふ、之れ實に答への秀逸なるもの、又まさしく其等の雄辯家に對する頂門の一針であつた。もう一つ斯う云ふ話しがある。アテネの人々が或る大きな工事の監督をさせる爲に、二人の建築家の中から一人を選ばなければならなかつた。第一の候補者は氣取つた服裝をして、彼が豫め其の問題に就いて綿密に作り上げた一大卓論を携へて出席した。其の結果、人々の意向は彼れの方へ傾いた。然しも一人の候補者は僅か三語で自己を推薦した「アテネの諸賢！　彼れが云つた事は、私が實行する[註七]。」シセロの雄辯正に酣なる時、多くの人々は其の賞讃に夢中になつて居た。然し乍らカトーン Caton は たゞ笑つて云つた「吾々は愉快な統領(コンシュル)を有つて居る[註八]。」有益な文句や立派な特質は、時の前後を問はず、常によいものである。縱令其れが先きの人にも後の人にもよくないとしても、其れ自身に於いてよいのである。私はよい韻律(リズム)がよい詩を作ると考へる者の一人では決してない。縱令詩人が短い綴りを長く使ふとして

も、それ故に其處に力があるとは思はない。若し獨創が其處から閃き出るならば、精神と判斷がよく其の任務を果して居るならば、私は云ふであらう、其處には一個のよい詩人がある、然し乍ら又一個の惡い押韻家があると。[註九]

Emunctae naris, durus componere versus.

彼の押韻は閑却されて居る、然し彼は奇趣に富む而して此時――ホラース Horace は云ふ――彼の作品は凡ての停頓(クーチュール)と音格(メジュール)を失ふ。

Tempora certa modosque, et, quod prius ordine verbum est,
Posterius facias, praeponeus ultima primis.

Invenias etiam disjecti membra poëtae,[註十]

韻律と音格とを變更せよ、言葉の順序を顚倒せよ、而も汝は常に此四離滅裂の言葉の中に詩人を發見するであらう。

詩人は其れが爲に消失しないであらう。喜劇を一つ作ると約束した日が近づいたのに、何故まだ着手しないのかと云つて、或人が怒鳴り込んだ時に、メナンデル Menander[註十一] が答へた「ありやもうちやんと出來て居る。たゞ詩の文句に引き直せばいゝのだ。」彼は既に其の材料や內容を心の中で調へて居たから、其後の仕事は何んでもないと考へて居た

のである。ロンザール Ronsard[註十二] とヂュ・ベレー du Bellay[註十三] と
が吾々の佛蘭西の詩の聲價を高めてからこの方、乳臭黄嘴
の若輩にして而も此等の詩人と殆んど同様に、其の用語の
誇張や措辭の巧妙に浮身を窶さゞるもの一人も無い有様
である。Plus sonat quam valet.[註十四] (其れは眞價以上に高く鳴り
響く)。俗衆にとつては今日程詩人の多い時代は無いであ
らう。然し乍らロンザールやヂュ・ベレーの韻律を現はす
ことが彼等にとつて容易になるにつれて、前者の豐富な叙
述や後者の纖麗な思想を模倣する方面は缺けて來て居る。

註一 Horatius—Ars Poetica, 311

註二 Seneca—Controv. II. proem.

註三 Cicero—De Finibus, III. 5.

註四 ローマの歴史家タキツス(55—120A.D.)

註五 有名なるローマの雄辯家 Domitius Afer
タキツスの「雄辯家問答」參照。

註六 Plutarch—Apophthegm.

註七

Plutarch—Instr.

註八

Plutarch—Vita Cat. 6.

註九

Horatius—Sat. I. 4. 8,

註十

ib. I. 4. 58.

註十一

アテネの新喜劇詩人 Menander (342—291B.C.)

註十二

Pierre de Ronsard (1524—1585)

註十三

Joachim du Bellay (1525—1560)

註十四

Seneca—Epist. 40.

(四三) 然し乍ら若し人あつて似而非三段論法の詭辯的穿鑿に依つて吾が教へ子を窮地に陷れるならば、彼は如何にすべきであらうか。「鹽豚(シャンポン)は飲を起す、飲は渴を醫す、夫れ故に鹽豚は渴を醫す?」。此の如きものに對しては、彼は是れを一笑に附するがよい。是れを一笑に附するは是れに應答するよりも、其慧敏に於いて勝ること數等である。彼は又アリスチッポスから其の痛快な詭辯的反問を借りるもよからう——「私は到底解くことが出來ない樣にすつか

り縛られて居るのに、何故其れを解かなければならないのか？」[註一]。或る人がクレアンテスに對して同様の辯證法の詭辯をもち出した。クレアンテスは對へた「そんな惡戯は子供を相手にやるが宜しい。其れで大人の眞面目な思想が動かせると思つてはならぬ。」[註二]此の如き愚にもつかない詭辯、Contorta et oculeata sophismata[註三]（やゝこしい、とげとげした詭辯）が彼に虚僞を教へ込むならば、其れは危險である。然し乍ら其れが何等の效果もなしに止る時、單に嘲笑を惹き起すに過ぎない時、私は彼が是れに對して格別用心しなければならぬ理由を見出さない。世には當意卽妙の言葉を

漁る爲に一寸十五分許り道草を喰ふ馬鹿者、aut qui non verba rebus aptant, sed res extrinsecus arcessunt, quibus verba conveniant[註四]（或ひは事柄に言葉を合はさないで、反對に言葉の合ふ様な事柄を引つ張り込む）馬鹿者、或ひは又 qui alicujus verbi decore placentis vocentur ad id quod non proposuerant scribere[註五]（好きな言葉を用ゐる爲に彼等の主題から脱線する）馬鹿者がある。私は私の對象を探し廻る爲に本筋から脱線するよりも、寧ろ私の對象に適合させる爲に、よい文句を捏ね上げようと思ふ。言葉は役立つべきもの、隨從すべきものである。若し佛蘭西語でうまく行かないならば、或ひはガス

コン語[註六]で行かう。私の意見では内容が主であつて、此内容が聽き手の想像力を充たす場合に、言葉の上には心が留まらないやうに行かなければならない。私の好きな叙述法は談話でも文章でも、簡素な無技巧の其れである。精分の多い、精力に溢れた、而も簡潔に切り約められた、軟弱、精密よりも寧ろ激烈唐突なる、

Haec demum sapiet dictio, quae feriet.[註七]

たゞ射るが如き叙述法こそよけれ。

冗長よりも寧ろ難解な、修飾のない、衒學臭味を脱した叙述法。各斷片が其れ丈で獨立して居り、教師や說教師や辯護士の談話と異り、スエトーヌ[註八] Suetone がユリウス・シーザルの其れを呼んだ如く(尤も私は彼が如何なる意味で此の名稱を其れに與へたかを知らないが)軍人的(ソルダテスク)な叙述法。

註一 Diogenes Laertes—II. 70.

註二 id. VII. 183.

註三 Cicero—Acad. II. 24.

註四 Quintilianus—De Instit. Or. VIII. 3.

註五

Seneca—Epist. 59.

註六

仙蘭西のガスコーニュ Gascogne 地方の方言。

註七

Fabricius—Bibliotheca Latina (1697) 中に引用せられたる Luciani (120—190 A.D.) の墓碑銘である。Luciani は紀元後に於ける最も偉大なるギリシャ語著作家と稱せらる。

註八

即ち有名なるローマの歴史家スエトニウス Suetonius (75—160 A.D.) 彼はユリウス・シーザルの傳を書いて居るが、シーザルの話し振りを軍人的と評したことはないと云ふことである。之れはモンテーニュの何かの讀み違へらしく思はれる。

(四四) 服裝の點に於いて現代の青年の間に見らるゝ如き其放縱を私は態と模倣した。何んとなれば斜めに引つかけた外套、片方の肩からぶら下げた上衣、弛んだ靴下、凡そ此等のものは異樣な、技巧的な美裝に對する冷淡侮蔑の誇りを示すものであるからである。然し是れは談話の形式に關しても一層よく宛てはまると思ふ。凡て氣取つた態度は、わけても佛蘭西人の自由豁達の氣象に於いて、廷臣には似つかはしからざるものである。而して一つの王國に於いて凡ての紳士は廷臣の態度にまで敎育せられねばならぬ。夫れ故に吾々は寧ろ素朴、無頓着の方に向ふが宜し

い。吾々は一つの美しい肉體に於いて、其の骨や血管を數へ得ることを必要としない如く、繼ぎ目や縫ひ目のあらはな衣服を好まない。Quae veritati operam dat oratio, incompositа sit et simplex.[註一] (眞理は簡素な、技巧のない言語を話さなければならぬ)。Quis accurate loquitur, nisi qui vult putide loqui.[註二] (餘りに用心深く話すものは穿鑿技巧の弊に陷る)。雄辯其ものに吾々の心が惹きつけられる時、雄辯は其の內容に損害を與へる。衣服に關して何か異樣な、奇拔な型に依つて他人の注意を惹かうとする所に卑劣な心が見える如く、言語に就いても、斬新な話振りや、餘り知られて居ない用語の穿鑿は衒學的な、子供らしい名譽心から來るものである。私はたゞ巴里の市場で使はれて居る樣な言葉を使はうと思ふ。文法家アリストファネスは彼がエピクーロスを批難した時、エピクーロスが、言葉の簡潔を尙び、叙述の明瞭を以て雄辯術の唯一の目的とした事を少しも理會して居なかつたのである。話し振りの模倣は容易い事であるからして、其れは忽ちにして全國民を引きづつて行く。判斷や發明の模倣はそう速くはない。多くの讀者は、同樣の衣服を見る故に、同樣の肉體が其所にあると速斷する。裝飾や外套は借ることが出來るが、體力や精力は借ることが出來

ない。常に私に出入する人々の大部分は私の "Les Essais" の如くに語る。然し乍ら彼等が同様に考へるや否やを私は知らない。プラトーンは云つて居る——アテネの人々は言語の豐富と優雅とに苦心する。ラセドモンの人々は簡潔に努力する。クレートの人々は言葉よりも思想の該博を尙ぶ。是れ最善なるものであると。ッェノンは彼れが二種類の門弟を有つたと云つて居る。卽ち一は彼れが φιλόλογους と呼んだ者であつて、事物其ものを學ぶに熱心にして、彼の寵愛する所であつた。他は λογοφίλους であつて、言葉の外に何等の關心を有せざる者である。然し乍ら斯樣に云つたからとて、巧に話すことが一つの下らない事柄だと云ふのではない。たゞ世人が考へる程重要な事柄でないと云ふのである。而して一生斯う云ふ事柄に沒頭するのは愚なことであると私は思ふ。私は先づ第一に、吾々の國語に習熟し、然る後、最も交渉の多い隣國の言語を學ぶ樣に致し度いと思ふ。

註一　Seneca—Epist. 40.

註二　Id. ibid. 75.

（四五）ギリシャ語やラテン語は、疑もなく、立派な裝飾である。然し乍ら世人は是れを餘りに高價に購つて居る。世間の習慣に依るよりももつと上手に買ふ方法で、私自身實際にやつて見た所のものを私は茲で傳授しませう。御氣に召した人々には或は役に立つかも知れない。今はなき私の父は優れた敎授の方法に關して、博學宏才の人々とも相談して、人間として出來る限りの研究をした。彼れは傳統的な方法に缺點のあることを確信して居た。人々は彼に云つた――古代のギリシャ人、ローマ人にとつては全く自然で何等の代償にも値しなかつた所の言語の學習に

吾々が永い歳月を浪費することが、吾々をして彼等の精神的偉大、知的完成に到達することを不可能ならしめる唯一の原因であると。私は其れが唯一の原因であるとは思はない。それは兎も角として、私の父の發見した方法は次の如きものであつた。私が離乳せられ、舌が廻る樣になるに先立つて、父は一人の獨逸人をして私の保育に當らしめた。彼は後に有名な醫師として佛蘭西で亡くなつた。此人は吾々の國語は出來なかつたが、それ丈ラテン語に精通して居た。父は態々此人を招聘して、厚く待遇した、此人が斷えず私に附き添つて居た。尙彼の補助役として、彼程は學問

の出來ない二人の男が附き添つて居て、常に私から眼を離さなかつた。此等の人々は皆ラテン語以外の言葉を私に話さなかつた。父の邸の其他の人々は何うかと云ふと、父自身も、私の母も、家來共も、腰元も、私と一緒に居る時は、私と雜談する爲に銘々が學んだ所のラテン語の片言以外は何ものも話してはならないと云ふのが冒すべからざる掟となつて居た。此事が凡てのものに與へた效果は實に驚く可きものであつた。私の父も私の母も私の言葉を理解するに足る丈のラテン語を學んだ。而して必要に應じて滿足にラテン語を利用することが出來るやうになつた。私

に專屬の家來達も同樣であつた。要するに吾々は凡てのものをラテン語化したのであつて、其の影響は近隣の村々に及んだ。今日に於いても尙、職人や家具のラテン名稱が澤山殘つて居て、習慣に依つて其儘通用して居る。そこで私はどうしたかと云ふと、私は六歳になる迄は佛蘭西語もペリゴール語もアラビヤ語同樣で、全く解らなかつた。而して技藝もなく、書物もなく、文法の面倒な規則もなく、鞭撻(文字通りの)もなく、流涕もなしに、私は私の學校の先生が知つて居るのと同じ程度に純粹なラテン語を習得した。何んとなれば私は其れを混同したり、俗化する機會を有たな

かつたからである。人若し現代の學校に於ける習慣に從つて私を試驗しようと思ふならば、他の者には佛蘭西語の問題でやらす樣に、私には、間違つたラテン語を正しいラテン語に直すことを要求すべきである。「ローマ人の公會に就いて」de Comitiis Romanorum を書いたニコラ・グルッシー Nicolas Groucchi や、アリストテレスを註釋したギヨーム・グラント Guillaume Guerente や、蘇格蘭の大詩人ジョージ・バッカナン George Bucanan や、佛蘭西幷に伊太利で當代第一流の雄辯家として認められたマール・アントアンヌ・ミュレー Marc Antoine Muret は皆私の家庭教師を勤めた人々である[註一]

が、子供ながらも私のラテン語は非常に手に入つたものであつたので、彼等は私に話しかけるのが恐ろしかつたと屢々私に語つた。バッカナンは其後彼が故ブリサック Brissac 元帥の隨行員を勤めて居る時に逢つたことがあるが其時、彼は兒童の教育に就いて何か書きつゝあることを私に告げ、私の教育を模範に取ると云つて居た。後に吾々の間に勇名を轟かしたブリサック伯は當時バッカナンの手に託せられて居たのであつた。

註一

George Buchanan (1506—1582) は蘇格蘭の學者、詩人、歴史家として

聞こえて居る。彼がモンテーニュの師となつたのはボルドーのギアンヌの學校に於いてゞあつた。當時彼は此學校のラテン語の教授であつた。後 Maréchal Comte de Brissac に知られ其子 Timoléon de Cosse の傅となり、再に數年の後歸國して種々の要職に就いたが、一時は歴史に有名なる Queen Mary の教育にも携はつた。

（四六）ギリシヤ語に關しては私はこれと云ふ程の知識を有たないが私の父は之れを、人工的ではあるが、遊戯や競技の形式に倣つた或る斬新な方法で學ばせる樣に工夫した。將棋の遊戯に依つて算術や幾何を學ぶ人達の樣な風に、私達は言葉の變化（デクリネーソン）を學んだ。これは人々が、强制なしに、私自身の願望に依つて、知識幷に課業（ツヴオアル）に對する興味を喚起し、嚴格や拘束に依らずして、全く溫和な、自由な態度で、吾々の精神を教育する樣にと云ふことを、何よりも先づ第一に父に勸めたからである。かう云ふ點に於ける父の杞憂は殆んど迷心に近いものがあつた。即ち或る人が子供の睡眠は成人の其れよりも余程深いものであるから、朝、彼等を覺醒させる際に、威したり驚かせたりして、急に無理に睡眠から彼等を引き離すと、其の柔い腦髓に害を與へると云つた爲に、彼れは或る樂器の音で私を目覺ます樣にした。そこで此役目を勤める人が常に私に附いて居た。

（四七）此等の例は余他の事に關して判斷を下し、かくも良き父の賢明と親愛とを推奬するに充分であるであらう。縱令（たとし）や父が此至り盡くせる教育（キュルチウール）註一に相應する丈の成果を收めなかつたとしても、其れは彼の罪ではない。其れには二つの原因がある。第一は耕地の不毛、不適當と云ふことである。私は大丈夫な申分の無い健康を有つて居たし、又同時に柔い取り扱ひ易い性質を有つて居たけれども、それでも曾て人々が懶惰の癖から私を引き離し、私を遊戲に誘ふに成功したことはなかつた程、遲鈍で、優柔で、眠つたげな子

供であつた。私の觀る所のものは、私は充分しつかりした、はつきりした判斷を以て觀た。而して此眠つたげな外貌の下に大膽な空想や、私の年齡相應以上の思想を養つて居た。然し乍ら私の精神は緩漫で、人々が私を導いた所から先きへは進まなかつた。又理解は遲鈍で、判斷は臆病であつた。最後に私の記憶力は信ずることの出來ない程薄弱であつた。かう云ふ次第であるから、私の父がこれと云ふ程の良結果を收め得なかつたことは不思議ではない。第二の原因は斯うである。恰も治療を熱望して居る者が有らゆる忠言に聽從せんとする如く、善良な私の父は彼がか

くまで心に懸けて居た事柄をやり損じてはならないと云ふ非常な恐怖からして、恰も鶴(グリュー)の様に、常に眼前に動く有らゆるものを追つかける所の通俗な意見に依つて、遂に押し流されてしまつた。彼れは其の最初の方針(彼は之れを伊太利から輸入した)を彼に勤めた人々が彼の周圍に居なくなつた時、とうとう一般の習慣に屈服して、當時隆盛を極めて佛蘭西最良のものであつたギアンヌの中學校 College de Guienne へ六歳許りになる私を送つた。然し此所でも父は彼の考へに添ふ様に出來る丈の取計らひをしなければ承知しなかつた。かくて彼は私の爲に充分立派な教師を

選ぶことや、其他教育の諸條件に就いて色々心配して呉れたが、後者に就いては、彼は此學校の習慣に反して種々の特權を保留した。でもそれは矢つ張り學校であつた。私のラテン語は直ちに墮落した。其れ以來練習の不足の爲に其の應用の自在を失つてしまつた。私の是れ迄の新式の教育は、たゞ私をして入學後直ちに最上級へ飛躍せしむる效能をもたらしたに止る。何んとなれば私が十三歳で此學校を出た時、(人々が云つた如く)實際の所私が今日御話が出來る様な何等の結果をも得ずに私の課程を終了したのであつた。

註一 "Culturre" は本來は耕作の意。それ故に次にある「耕地の不毛」云々へ意義が連絡する。

(四八) 私が書物に對して有つた最初の興味はオヴィド[註一] Ovide のメタモルフォーズ Metamorphose の物語が與へた滿足から來て居る。何んとなれば七歳や八歳の年齡頃に於いて私は此等の物語を讀む爲に其他の凡ての歡びから遠ざかつたのであり、殊に其の言語は私にとつては母の言葉(國語)であり、又其れは私の知つて居た最も容易い書物であり、其の內容から云つても子供の薄弱な理解力に最も適應して居たからである。「湖上のランスロー」Lancelots du Lac や、「アマヂ」Amadis や、「ボルドーのユオン」Huons de Bordeaus や、其他今日の子供が喜ぶ樣な文集は其の名前さへ知らなかつたし、其の內容に至つては今日も尙知らない。それ程私の訓練方は嚴格であつた。其他の私に課せられて居た教課の勉强はうんと怠惰けて居た。此點に於いては私が教師の中に、私の此放埒や其他の反則に對して巧に見て見ぬ風をして呉れる、よくものゝ解つた一人の人を有つたことは誠に好都合であつた。御蔭で私は常に主題の美に惹きつけられて、オヴィドからヴェルジル[註二] Vergile の「エ

ネイド」Aeneide へ、其れからテランス[註三] Terence 其れからプロート[註四] Plaute 更に伊太利の喜劇へと一直線に突進した。若し私の教師が此連鎖を中斷する程馬鹿であつたならば、(私は信ずる)私は吾々の貴族共の殆んど凡てが其學校からもたらした所のもの、卽ち書物に對する倦惡の外何物も其處から獲得しなかつたであらう。彼は單に私の書物の盜み喰ひを放任して置くことに依つて私の食欲を刺戟して吳れた。而して他の正規の學課の勉强に關しては、極めて手柔らかに督勵するに過ぎなかつた。是れ私の父が私の教育を委任した人々に對して彼れが求めた第一の資格は溫和寬容の性質であつたからである。私は又遲鈍と懶惰の外には何等他の缺點を有たなかつた。若し私に危險な點がありとすれば、其れは私が何か惡い事を爲るかも知れないと云ふことではなく、寧ろ私が全く何も爲ないかも知れぬと云ふ事であつた。人々は私が惡い事は決して爲ないが、然し一個無用の人間になるであらうと豫言した。人々は私から怠惰を期待したが、何等の惡意を期待しなかつた。此處からしてさうなつたのであると思ふが、私の耳に入る不平は斯樣であつた——あの男は怠け者で、友人や親族の義務に冷淡で、公共の仕事に對して余りに偏屈で、余りに高

慢だ。私に對して最惡の感情を抱く者と雖、何故彼奴は取つたのか、何故彼奴は拂はないのかとは云はなかつた。だ、彼奴は何故棄てないのか、彼奴は何故與へないのかと云つた。若し人々がおほまかな心の斯樣な表現の外に何物も私に望まないならば、私は其れを惠まれたる宿命として受け取るでせう。然るに世には譯の解らない人々があつて、私の義務でもないものを、而かも彼等が彼等の義務である所のものを彼等自身に要求するよりも遙かに嚴しく、私に要求するのであるが、之れは間違つて居ると思ふ。若し彼等が此點で私を責めるならば、彼等は其行爲から來る私

の滿足と、其行爲に對して彼等が私に支拂ふべき感謝とを帳消しにするものである。此場合、私の側には何等の債務がないのであるから、其點を考へれば、私の任意の善行に依つて私の手中の債權は其れ丈重みを加へる譯である。而して私のものが私のものになればなる丈、それ丈自由に私は其れを處置することが出來、又私が私自身のものであればある丈、それ丈自由に私を處置することが出來る譯である。然し斯く云ふものゝ、若し私が敢て私の行爲を吹聽しようと思ふならば、私は苦もなく此等の非難を擊退するであらう。而して或る人々には彼等は私が充分の事を爲さ

なかつた爲と云ふよりは、寧ろ私が實際やつたより以上にもつとやり得たが爲に感觸を害したのであると云ふことを理解せしめるのであらう。

註一　Ovid (43 B.C.—17 A.D.) ローマの詩人。其著 Metamorphoses は神話上の種々の物語を詩に歌つたものである。

註二　Vergilius (70—19 B.C.) Aeneid は此詩人が十個年の苦心の結果たる大作であつて、ローマ人の詩人的天才の最高の記念塔として今日に傳はつて居る。其の主題は Troy 殁落後に於ける Aeneas の伊太利定住であつて、初の六卷は Odyssey に、後の六卷は Iliad に以て居る。彼は紀元前二十九年に筆を起し、其の死

の時も尙之れを完成するに至らずして止んだ。

註三　Terentius (190—159B.C.) ローマの喜劇詩人。

註四　Plautus (254—184 B.C.) 古代ローマの喜劇詩人。

(四九)　私の精神はそれにも拘らず同時に其れが知つて居る事柄に關しては獨特の感激と確實廣濶なる判斷を缺いて居なかつた。而して其れは他人の仲介を待たずして直ちに之れを消化した。尙又私は、私も自らさう思ふが、他人の强制拘束に自らを服從せしめることは私には全く出

來ない事であつた。私は玆で私の幼年時代のさうした長所に就いて御話を致しませうか。私は自信に充つた顏つきと屈曲自在の音聲や身振りを具へて居たから、自分の演じた如何なる役にも自身を適應せしめることが出來た。と云ふのはまだ幼い頃

Alter ab undecimo tum me vix cepcrat annus,[註一]

やつと十二歳になるかならぬに

私はバッカナンやグラントやミュレーのラテン語劇で主役を勤めた。之れはギアンヌの吾々の學校で莊重に演ぜられた。かう云ふ事にかけては吾々の校長アンドレアス・

ゴウェアヌス Andreas Goveanus は、彼の職務の他の凡ての方面に就いても然る如く、佛蘭西に於ける如何なる校長よりも較べものにならぬ程優れた名校長であつた。彼は私を斯道の巨匠と考へて居た。私は此演技を名門の出である若い人達に對して諫止しようとは決して思はない。私は又其後、吾々の大名達が古代人の先例に倣つて、尊敬と賞讃の裡に、親しく此演技に專念するのを見た。ギリシャ人の間では名門の人々が是れを職とするさへ譽むべきことであつた。これは次の言葉が示して居る —— Aristoni tragico actori rem aperit: huic et genue et fortuna honesta erant; nec ars,

quia nihil tals apud Graecos pudoris est, ea deformabat.(註二)(彼は彼の意圖を悲劇俳優アリストンに打ち開けた。此アリストンは出生から云つても、財産から云つても立派な人であつた。彼の藝が彼の面目を傷けるやうな事はなかつた。是れギリシャ人の間には其れが少しも恥辱と考へられなかつたからである)。其れ故に此種の娛樂を擯斥する所の人々の無思慮や、立派な喜劇役者に對して吾々の村に入ることを拒み、人民に對して此等の公共的娛樂を差し止める所の人人の不正を私は常に咎めたのである。公儀の役人達は須く人民共を眞面目な信仰上の義務の爲めに集めると同樣に、娛樂や遊戯の爲にも集めるやうに骨折らねばならない。交際や親睦は之れに依つて增すのであつて、凡ての人々の面前で、又役人達の面前で演ぜられる所の此娛樂を措いて他に一層優雅な娛樂を彼等に指定することは出來ないのである。私は領主が父らしい愛情と慈惠の心から、其爲に自ら出金して、時々、人民を喜ばせるのを謂れのあることゝ思ふ。人々の澤山住む都會には此種の興行物の爲に設けられた一定の場所が無ければならぬ。此れは實に隱密の間に行はれる惡事を他に轉ずるものである。

註一

Vergilius—Eclog. VIII, 39.

註二

Titus Livius—XXIV. 24. チーツス・リヴィウスの著作は浩瀚なる「羅馬史」が其唯一のものである。

（五〇） 本問題に歸つて云へば、學習に對する欲情と愛情とを起こすことが第一である。然らざれば吾々は單に書物の重荷を負ふた驢馬を作るに過ぎない。世人は知識に滿てる衣嚢を持たせやうとして、彼等に笞打を與へるのである。然し乍ら眞に益の生まれる爲には、知識を自分の家に單に同居せしめる丈けではいけない。更に彼女を聚らせなければならぬ。(Pour revenir à mon propos, il n'y a tel que d'allecher l'appetit et l'affection : autrement on ne faict que des asnes chargez de livres ; on leur donne à coups de foüet en garde leur pochette pleine de science, laquelle, pour bien faire, il ne faut pas seulement loger chez soi, il la faut espouser.)

二　衒學に就いて

（一）　私は子供の頃、伊太利の喜劇の中に學校（ペダン）の先生が常に滑稽な人物として現はれて居り、吾々の間では村夫子（マジステー）と云ふ異名は殆んど名譽の意味を有たないのを見て屢々心外に感じた。何んとなれば私の教育は此等の人々に委ねられて居たのであるから、私は彼等の名聲に就いて無關心なるを得ないではないか。私は世の凡俗と判斷學識の優れた稀有の人物との間に存する自然の相違に依つて彼等を辯護しようと試みた。此相違は彼等が相互に異つた人生觀を有つて居る丈それ丈大きい譯である。然し乍ら教養の最高い人々が大抵此種の人間を輕蔑する事に氣がついた時に、私は當惑した――例へば吾が敬愛するヂュベレー du Bellay は云ふ、

然し私は就中學者振る學者を憎む。

Mais je hay par sur tout un sçavoir pedantesque.

而して之れは今に始まつた事ではない。何んとなればプリュタルクは「ギリシャ人」或は「學者（エコリヤー）」なる語はローマ人の間では擯斥侮蔑の言葉であつたと云つて居る。其の後私が生長するにつれて、これは大いに道理のあることで、magis

magnos clericos non sunt magis magnos sapientes[註一] (最も博學なる人間が最も賢明なる人間とは云へない)ことを發見した。然し乍ら何故に種々なる事物に關する知識を豐かに具へた精神が、其の爲に格別活潑にもならず覺醒もしないのか、何故に粗野な卑俗な精神が、自身を何等改善することなしに、曾て世界に現はれた最も優れた精神の思想や意見を懷抱することが出來るのかと云ふことは、今日も尙私には解らない。吾々の王女達の第一の方である、或る若い婦人[註一]が或る人の事を話して居る時、「他人の強い大きい腦髓を自身の中に受取る爲には、自分の腦髓を壓縮して、他のものゝはいる余地を作らねばならない」と私に云つたことがある。私は寧ろ、植物が余り多くの濕氣の爲に弱り、ランプが余り多くの油の爲に消える樣に、精神の獨立な活動が、余り多くの勉强と材料の爲に壓へつけられ、余りに雜多の事柄を取扱つて困惑し、最早整理し切れなくなつて、其重荷の下にへたばつて居るのであると云ひ度い。然し乍らさう許りとは云へない。何故なれば精神は營養を供給せられるについて益々生長するのであつて、古來の多くの例は、逆に、偉い將軍や顯著な政治家は同時に又大學者であつたことを示して居る。

註一　ラブレーがアントンムールの兄弟ジャンをして言はしめた格言(Gargantua, 1, 39)。

註二　恐らくマルゲリート marguerite。後にナヴァールの女王となる。

(二)　之れに反して凡ての公職から遠ざかつた哲學者達は、彼等の意見や彼等の行爲が彼等を滑稽なものにした時彼等の時代の喜劇の自由(リサンス)に依つて實に手痛く嘲笑せられた。誰かゞ彼等に或る訴訟事件とか、或る人の行爲とかに就いて判定を求めるとせよ。彼等は實に敏捷である。彼

等は又、まだ生命があるとか、まだ運動があるとか、人は牛と若干異なつたものであるとか、活動とは何、惱みとは何とか、法律、正義とは如何なるものであるとかを探求する。彼等が執政官に就いて、或は執政官に向つて話す時には、不遜な無禮な亂暴な態度である。彼等が王子或は國王の賞讃を耳にするならば――彼等にとつてはそれは羊飼であり、羊飼同樣怠惰であり、其の羊共を搾取したり、其毛を刈つたりするのが其唯一の仕事で、實は羊飼よりも一層下らないものなのである。誰かゞ二千町(アルパーン)の土地を有つて居るから豪いと云へば、彼等はこれを嘲笑して、彼等は常に全世界が彼

等の領土であると考へる。貴方が、七人の富有な御先祖があると云つて領主の自慢をすると、彼等は貴方をつまらない人間だと考へ、御前は自然の平等普遍の法則と云ふものを知らない、吾々には誰でも無數の御先祖があり、其中には金持も貧乏人も、王様も奴隷も、學者も文盲もあると云ふ。若し貴方がヘルキュレス[註一] Hercules の五十代目の子孫であると云へば、彼等はさう云ふ運命の贈物を見せびらかさうとする貴方の虚榮を笑ふのである。かくて世人は此種の人間は第一普遍の事柄を知らずして徒らに傲慢不遜なるものとして之れを輕蔑する。斯様にプラトーンは「テアエテトス」[註二] Théétète, Theaetetus の中に云つて居る。此のプラトーンの描いた哲學者の姿は吾々が吾々の哲學者に就いて描かねばならない其姿とは余程隔りがある。前者は通俗的なるものを超越して居たから、彼等が公共の行動を輕蔑したから、彼等が一定の高尚な、超俗的な原則に從つて、特有の、追隨を許さない所の生活を開拓したから、世人が之れを嫉視したのである。然るに後者は通俗な事柄以下に居つて公職に堪へないから、彼等が俗人の前に卑俗な生活と性格とを曳きづつて居るから、之れを輕蔑するのである。[註三]

Odi homines ignara opera, philosophia sententia.

余は言葉だけの哲學者を憎む。

註一　希臘羅馬神話にある大力の勇士。

註二　プラトーンの對話篇の一。

註三　羅馬の悲劇詩人 Pacuvius (220—130 B.C.) の著作中の語。

(三) 古代の哲學者は其の言葉に於いて偉大であつたと、したならば、其の行爲に於いて一層偉大であつたと私は云ひ度い。かのシラキューズの數學家[註一]が祖國の防禦の爲に其の學問を實際に役立てようとして、其の研究を中止し、忽ち恐る可き機械を動かして不可思議なる業を示し乍ら、而も彼の凡ての道具を蔑視し、それは單に子供の玩具に過ぎないものなるが故に彼の學問の品位を傷けたものと考へた如く、古代の哲學者は屢々行爲に依つて彼等の知識の實證を與へなければならなかつた時、其の精神が事物の本質への深い洞察に依つて如何に發展し、豐富になつたかゞ明瞭に現はれる程、高く天空に飛翔したのである。然し乍ら一度無能の士が政治の樞機を握るを見るや、彼等は退いて隱れた。而して何時まで哲學(フィロソフェー)せんとするのであるかとクラーテス[註二] Crates に問ふた所の人は次の答を得た——「驢馬

の御者が最早吾々の軍隊を指揮しなくなるまで。」ヘラクライトス[註三] Heraclitus は王位を弟に讓つた。而して子供達と神殿の前で遊んで日を暮したのをエフェソスの人々が批難した時、彼は答へた――「でも御前達と共に國政をとるよりも余程ましではないか」。又他の人々は志を世上の幸運の上高く標置しつゝ、法官の地位、否王位の尊嚴さへ尙且卑俗なりとした。エンペドクレス[註四] Empedocles はアグリゲンチナ人が彼に王位を提供した時、之れを却けた。タレス[註五] Thales が世人の卑吝にして財を積むに汲々たるを屢々非難した時、彼等は之れを以て彼が自ら能はざるが故に、葡萄は酸つぱいと云つた狐の痴態に倣ふものであるとした。然るに偶然の戯れに依つて彼も亦之れを爲し能ふ事を示した。彼は其の知識を貨殖の事柄に應用し、一年の中に、此道の巧者が生涯を費しても得られない程の富を獲得した。アリストテレスはターレス、アナキザゴラス[註六] Anaxagoras 等の如き人々が有用の事柄に充分の注意を拂はざりし故を以て賢(サーヴュ)にして而も思慮(ノンプリユデント)なき者とした。私は此兩つの言葉の區別を充分に識らないにしても、其れは格別吾々の學者達の辯護には役立たない――彼等が余んじて居る卑陋な、みじめな運命に關しては、彼等が賢明でもなく、又思慮もな

いと云ふことを明言するに足る充分の理由がある。吾々は其の第一の理由として此弊(術學)は學者が學問の方法に於いて誤つて居る所から來ると云つたがよいと思ふ。而して吾々が教授せられる様な方法では、生徒も教師も、縱令それに依つて一層物識りになるにしても、一層練(アピール)れた人物にならないことは不思議でない。實に吾々の父親達の心配も費用も知識を吾々の頭腦に詰め込むと云ふ唯一の標的をねらつて居る。見識とか道德とかは何等問題でない。若し諸君が通りかゝつた一人の男を指して「おゝ、博學なる人よ！」と叫び、他の一人を指しては「おゝ、善良なる人よ！」と

叫ぶならば、吾が國の人々は自(オ)ら第一の者に對して眼を見張り、彼に對して尊敬の念を抱くを禁じ得ないであらう。たゞ其處には「おゝ汝等、鈍き頭腦共よ！」と云ふ第三の叫び手が缺けて居る。吾々はよく「彼はギリシャ語或はラテン語が解るか」とか、「彼は詩を作るか或は散文を善くするか」と尋ねるが、彼は一層善良になつたかとか、彼は一層考深くなつたかとかは、それが第一肝要の事であるにも拘らず、毫も問はないのである。吾々は、誰がより多く知るかでなくて、誰がより善く知るかを自身に問はなければならない。

註一

アルキメーデス Archimedes (287—211 B.C.)。

註二 紀元前三二〇年頃、テーベの犬儒派哲學者であつてディオゲネスの門人。

註三 紀元前五一五年頃、エフェソスの哲學者。其の文章の簡潔にして晦澁なる爲に「暗黑」の異名を受けた。

註四 紀元前四五〇年頃、シシリーの自然哲學者。晩年エトナの噴火口に投じて踪跡を晦ましたと傳へられる。

註五 紀元前六三五年—五五五年、ミレトスの人、有名なる自然哲學者、數學家、且實際家。ギリシヤ七賢人の一人。屢々哲學の鼻祖と呼ばれる。

註六 紀元前五〇〇年—四二八年、自然哲學者にしてペリクレスの友人。

(四) 吾々はたゞ記憶を充たすこと許り骨折つて、悟性や良心は空虛の儘で閑却して居る。恰も鳥が屢々穀類を求めて、其の得たるものを以て彼等の子を養ふ爲に、自らは之れを食はないで、嘴にくはへて飛んで行く樣に、吾々の衒學者達は彼等の知識を書物の中から盜んで來て、之れを再び吐き出して、四方の風に吹き散らす爲に、暫く彼等の唇の邊

りにくつつけて居るのである。私自身の例が如何によく此愚を表明して居るか！　此の如きはまさしく私自身が此等の論文の大部分に於いて爲せる所のものではあるまいか？　私は書物の彼方此方から氣に入つたセンテンスを盜み取る。私は其の貯藏所を有たないから[註一]、これを長く保存する所存ではなく、たゞ此等の論文へそれを移植しようとするのである。此處では、實を云へば、此等のセンテンスは私に屬するものでもなく、又其の最初の場所に屬するものでもない。蓋し吾々は現在の知識で學者であるのであつて、過去の知識や未來の知識で學者であるのではない。

然し乍ら更に具合の惡い事には、其等の衒學者の門弟や其の雛子[ひよつこ]も亦、之れを食つて滋養を取らうとしないのである。かくて知識は、單に之れで裝飾したり、之れを以て會話したり、之れに就いて語つたりする爲に、手から手へ傳はるのであつて、恰も計算したり、投げたりする外には何の役にも立たない玩具の貨幣の如きものとなる。Apud alois loqui didicerunt, non ipsi secum.[註二] (彼等は他人と語ることを知つて居るが、自身と語ることを知らない)。Non est loquendum, sed gubernandum.[註三] (語ることではなく、支配することが問題なのである)。自然は、彼等の導く所のものに於いて何等粗惡な

るものゝ存せざることを示す爲に、技巧的な教養を受くること最も少い國民に於いて、往々、最も技巧的なる思想を凌駕する所の精神產物を生ぜしめる。或る牧歌から來たガスコン語の俚言が私の此主張に關して如何に意味深長であるか——Bouha prou bouha, mas à remuda lous dits qu'em.（吹くは、吹くは、何と云ふ吹き方だ！　でも指を動かす爲に吾々は其處に居る）。吾々は云ふことが出來る——「キケロは斯樣に云つた、」「見よ之れプラトーンの見解である、」「之れまさしくアリストテレスの言葉である」と。然し乍ら吾吾自身は何と云ふのか？　如何に判斷するのか？　抑何をするのか？　何々曰くなら鸚鵡でもそれ位は云へるであらう。

註一　モンテーニュは記憶力が極めて薄弱であつた。「兒童の教育に就いて」四七節を見よ。

註二　Cicero—Tusc. Quaest. V, 36.

註三　Seneca—Epist. 108.

（五）此處からして恰も私が思ひ起すのは有らゆる方面の學問に堪能な人々を招聘する爲に莫大の金錢を費して

大骨を折つた一人の富めるローマ人のことである。彼は此等の人々を常に彼の周圍に居らしめ、彼の友達の間に彼れや此れやの事柄に就いて話す機會の生ずる毎に、彼等をして彼の代理たらしめ、各々其の得意に應じて、或る者は演說を、又或る者はホーマーの詩句をと云ふ風に、卽座に材料を彼に供給せしめた。彼は、此等の知識は彼の傭人の頭の中にあつたのであるから、取りも直さず彼の知識であると考へた。同樣に或る人は彼等の高價な書庫の中に貯藏して居る知識は皆自分の知識であると考へて居る。私が彼の知識の如何なるものであるかを問ふと、是れを示す爲に、

私に斯樣々々の書物を持つて來いと命ずる人を私は知つて居る。若し彼が直ぐに彼の辭書で「疹癬」とは何、「下部」とは何と云ふ事を調べないならば、彼はたゞ下部の疹癬を患つて居ると、私に云ひ兼ねまじいのである。

（六）吾々は他人の意見や知識を自身の中へ採り入れる。而してもうそれで滿足して居る。吾々は之れを吾々のものにしなければならないのである。吾々は火が欲しくて、之れを隣人の所へ探しに行つて、奇麗な大きな火を見付け、其處で身體を暖めて居る間に、其れを自分の家へ持つて歸

ることを忘れてしまう人間に似て居る。縱令胃の中に食物が一杯となつて居ても、胃が之れを消化しないならば、之れが血と肉とにならないならば、更に又之れが吾々の營養となり、吾々を强壯にしないならば、其れは何んの役にも立たない。實地の經驗なしに、たゞ知識だけで、あの樣に偉大な、あの樣に智謀に長けた將軍になつたルキュルス[註一] Lucullus が吾々の樣なやり方で知識を獲得したと信じ得られやうか。吾々は餘り他人の力に便り過ぎる結果、自身の力を失ふのである。若し私が死の恐怖に對して私を武裝せんとするならば、セネカの代償に於いて之れをなすのである。

若し私が自分の爲に或は他人の爲に慰藉を得んとするならば、キケロから之れを借りて來るのである。若し私の敎師が私を訓練して居たならば、私自身から之れを作ることが出來たであらう。私は此獨立でない、乞食の貰物の樣な知識を毫も好まない。縱令他人の知識に依つて博學になることが出來やうとも、吾々は自身の賢明に依つて賢明となり得るのである。

Μισῶ σοφιστὴν ὅστις οὐχ αὑτῷ σοφός.

「彼は云ふ、私は獨りで賢明にならない賢者を嫌ふ」。

Ex quo Ennius: Nequidquam sapere sapientem, qui ipse sibi

註三 prodesse non quiret:(それ故にエニウスは云ふ、自身で賢明にならない賢者は賢者ではない)、

Si cupidus, si
註四
Vanus et Euganea quantumvis mollior agna.

若し彼が貪欲で、虛榮で、エウガネアの小羊の樣に柔弱であるならば。

註五 Non enim paranda nobis solum, sed fruenda sapientia est. (賢明を獲得するだけではいけない、更に之れを受用しなければならない)。ディオニシウス Dionysius, Diogenes は、ユリッセス註六 Ulysses, Odysseus の惱みを研究するけれども自身の惱みを閑却する文法家や、笛の音を調和させるけれども、自身の德を調和させない音樂家や、正義を言ふことを努めるけれども之れを實行することを努めない雄辯家を嘲笑した。若し吾々の品性が知識に依つて一層善良にならないならば、若しも吾々の判斷が其れに依つて一層健全にならないならば、私は寧ろ私の敎へ子をして球戯に暇を潰ぶさせようと思ふ。少くとも身體は一層敏活になるであらう。十五年或は十六年の間を學窓に費した後歸り來る彼を見よ。使ふのに是れ程具合の惡いものはない。先づ目に附くのは彼のラテン語やギリシャ語が、曾て彼が父の家を辭し去

つた時よりも、彼を一層遲鈍且傲慢ならしめたことである。
豐富な精神を持つて歸るべきである彼は、たゞ思ひ上つた
精神を持つて歸る。生長せずして單に膨れ上つて居る。

註一
Lucullus Licinius (110—57 B.C.)。有名なるローマの將軍。

註二
Euripides の詩句。モンテーニュは之れを引用した後、直ち
に次行で自ら之れを佛譯して居る。

註三
Cicero—De Officiis, III, 15.

註四
Juvenalis—VIII, 14.

註五
Cicero—De Finibus, I, 1.

註六
ホーマー「オデッセイ」の主人公。

(七) 學校教師は、彼等の兄弟分なるソフィースト達に就
いてプラトーンも云つて居る樣に、有益なる仕事を人々に
約束する點に於いてはあらゆる人間中第一の者である。
而して人々が彼等に依賴した仕事を善くしない(大工や石
工は之れをする)のみならず、却つて惡くして置き乍ら、其の
惡くしたことに對して報酬を要求する點に於いてはあら

ゆる人間中唯一の者である。ピタゴラスが彼の門弟達に提示した規定は、彼等が彼の要求通りに支拂ふか、或は彼等が彼の教へに依つて獲得した利益を如何程に見積もるかを神々の前に誓ひ、其れに應じて彼の勞に酬ゆべしと云ふのであつた。若し此規定に從ふとして――私が私の經驗に據つて起て得る誓ひのまゝに謝禮を出すとしたならば、私の先生達はさぞ嫌な思ひをすることであらう。恰も諸君が學問の爲に損はれた人間を lettreferus(學問中毒者)と呼ぶ樣に、私の鄕里のペリゴール人共は此等の博學なる人間を冗談に lettreferits と呼ぶ。實際の所彼等は大抵馬鹿になつてしまつた樣に見える、否殆んど人間の悟性を失くしてしまつた樣に見えるのである。百姓や靴屋は單純素朴、彼等相當の所を行つて、彼等の理解することを話して居る。然るに此連中となると、單に其の腦髓の周邊に漂うて居る知識を誇り、之れを喋々せんとして、斷えず困迷惑亂するのである。彼等は美言佳句を連發する。而も何人も之れを理解しない。彼等は不機嫌をよく認識しても、病氣は皆目解らない。彼等は尙訴訟の爭點を捉へざるに、はやくも若干の法文を引用する。彼等はあらゆるものゝ理論を知るけれども、之れを實際に應用する人は尙見出されなければ

ならないのである。

（八）曾て私の家で私の友人が、閑暇潰しの態度で、此種の人間の一人を相手に議論を爲ながら、ちんぷんかんの出鱈目、前後の次第もない戯言、引用句の襤褸を僞造し、たゞ合間合間には理窟の合つた言葉を混ぜ入れて、他人の如何なる反對論でも辯護しようと考へる此馬鹿者と言ひ爭つて終日興がつて居るのを見たことがある。世の學者とか、名聲家とか、立派な法服を着けた連中とかは先づこんなものである。

Vos, o patritius sanguis, quos vivere par est
Occipiti caeco, posticae occurrite sannae.

註一

おゝ汝等、背後に何が起りつゝあるかを見る爲に頭を回らすことをも敢てせざるパトリシアン達よ、少しは汝等の背後なる人々の頻蹙を驚かせよ。

此種の人間は可なり多いが、人若し彼等をよく觀察するならば、彼等は大抵の場合、自分自身も他人も理解しないのであり、其の記憶は色々の事で充滿であるが其の判斷は空虛であることを私と共に發見するであらう。たゞ極めて少數の者のみは其の固有の天稟に依つて卓越せる見識を具

へて居る。私は之れをアドリアヌス・ツルネブス Adrianus Turnebus に於いて見る――彼れは學問以外の何等の仕事にも從事しなかつた。而して私の見解に依れば、其の學問に於いて一千年以來の最も偉大なる者であつた。それにも拘らず彼は衒學者風の何ものも有たなかつた。たゞ彼の法服の着方や其他外的の事柄が彼を廷臣(クルチザーヌ)にまで洗練せられ得ざらしめたが、それは何んでもない事柄である。邪曲の人よりも一層不器用に法服を着けつゝ、而も彼の禮儀に於いて、彼の風采に於いて、彼の長靴に於いて、彼が如何なる人間であるかを注意する人々はげに讃むべきかな！

註二 二〇四

何んとなれば內面に於いては彼は世に最も洗練せられた人であつたからである。私は屢々態と、彼をして彼の專門から懸け離れた談話の中に陷らしめた。而も彼は斯かる際にも、恰も彼が戰爭と國務の外には如何なる仕事にも携はらなかつたと思はれる程、敏活な理解力と健全なる判斷力とに依つて、明瞭に事物を徹見した。此の如きは

Queis arte benigna
Et meliore luto finxit praecordia Titan.

註三

特別の恩寵に依つてプロメテウスが優良なる原質を以て作つた所の、

而して不良なる教育に依つても損はれずに自らを維持する所の優勝且堅牢なる天性である。抑も吾々の教育は吾吾を惡くしないと云ふだけでは充分でない。其れは吾々を變じて一層優良ならしめ、吾々を矯正しなければならない。然らざれば其れは虛名であり、無用である。

註一　Persius, I, 64. パトリシアンはローマの貴族階級。

註二　Adrianus Turnebus (1512—1565)。モンテーニュと同時代の古典學者。ノルマンヂーに生れ、一五四七年巴里に於いてギリシヤ語の教授とある。プルタルコス、テオフラスツス其他のギリシヤ古典をラテン語に翻譯して名聲歐洲に轟いた。彼は又キケロを註釋した。

註三　Juvenalis, XIV, 34. プロメテウスはギリシヤ神話にある人間製造者。

(九) 吾々の法官會(パルルマーン)の或るものは官吏の任用に際して、單に學問だけに就いて是れを試驗した。又他のものは、更に彼等をして何等かの訴訟事件を裁斷せしめることに依つて、其の判斷力を試驗した。私には此後者が遙かに優れた方法であると思はれる。縱令學問と判斷力と兩方共必要

であり、兩方共具はつて居なければならないとしても、知識は判斷力よりも價値の少い事は確かであり、判斷力は知識なしにでも立ち行くが、逆に知識は判斷力なしには立ち行かない。何んとなれば次のギリシャ語の詩句が語るやうに、

'Ως οὐδὲν ἡ μάθησις, ἢν μὴ νοῦς παρῇ. 註一

「若し理解力がなかつたならば、學問は何の役に立つか？」

此等の法官會が學問と共に理解力や良心を充分に具へて居るならば、吾々の司法權は幸なるかなである。不幸にも Non vitae, sed scholae discimus. 註二 (吾々は人生の爲に學ばずして、學校の爲に學ぶのである)。抑も學問を精神にくつ附けるだけではいけない。之れを精神に合體させねばならない。學問に依つて精神を覺醒するだけではいけない。之れに依つて精神を染め上げねばならぬ。而して若し學問が精神を變化し、其の最初の不完全な狀態を改良しないならば、寧ろ學問などは止めて置く方がよい。學問は利劍の如きものであつて、それが薄弱な、不器用な手の中にある時には、其の持ち手の邪魔物となり、危險物となる、ut fuerit melius non didicisse. 註三 (それ故に何んにも知らない方がましである)。吾々も敎會も女子に多くの學問を要求しない理由

は恐らく玆にあるものと思はれる。又それ故にジャン五世の子、ブルテーニュ公、フランソア François, duc de Bretaigne, filz de Jean cinquiesme は、人々が蘇格蘭の王女イサボー Isabeau と彼の結婚に就いて彼に話し、尙彼女は學問などはせずに單純に養て上げられたと附け加へた時、「それだから私は彼女が一層好きなのだ。女は夫の肌衣と胴衣の區別が出來れば學問はもう澤山だ」と答へた。

註一　モンテーニュは此句を Stobaeus (6 Cent.) の著作中より引用して、直ちに次行に自ら佛譯して居る。

註二　Seneca—Epistolae, 106.

註三　Cicero—Tusculum, II, 4.

（一〇）又世人が推測する如く、吾々の祖先が學問上で大した活動をやらなかつたことや、今日でも學者で王の顧問たる人は先づ例外に屬することは格別不思議ではない。而して今日も尙各人が法學や醫學や語學や將た又神學の手段に依つて自身を富ますことを唯一の目的として、此等の學問を尊敬しないとせば、それは今も昔同樣誠に哀れな狀態にあると云はねばならぬ。此等の學問が善く考へ、善

く行ふことを吾々に教へないならば、實に遺憾千萬である。Postquam docti prodierunt, boni desunt.[註一] (學者出現以來善人無し)。善の知識を有たないものにとつては、余他の凡ての知識は有害である。

註一　Seneca—Epistolae, 95,

(一一) 扨私が先刻から探求して居た理由は此の邊にもありはすまいか——佛蘭西に於ける吾々の學問修業は營利の外に殆んど何等の目的を有たない有樣であるから、出生が善くて、營利よりも寧ろ名譽の職に就く樣になつて居

る人々が學問に專念することは比較的少い。或は彼等は極めて僅かの間學問に從事するのみであつて、其の味を知るに先つて、最早書物と何等の關係もない活動に轉じてしまうのである。其處で、學問に全然沒頭するものとしては、通常、此れに依つて生計の道を立てる連中だけが殘ることとなる。然るに此連中の精神は天性並に家庭の教育や影響に依つて甚だ卑陋なるものであつて、學問の美果を收め得ないのである。何んとなれば其れは自身に光を有たない精神に光を與へるのでもないし、盲目(めくら)を目明きにする譯でもない。其の任務は他人の精神に視力を與へることで

なく、視力を他人の方に向け、他人に其の歩む道を敎へるにある。此場合他人が立派に歩ける脚を有つて居ることは無論の事として問題外に置かれて居る。知識は良藥であるる。然し乍ら如何なる良藥も、若し之れを容れる器が惡いならば、變質腐敗せざるを得ない。多くの人は鋭い眼を有つて居る。然し乍ら之れを眞直に有たない。從つて彼等は善を見るけれども之れに從はない。知識を有つけれども之れを使用しない。「理想國」に於けるプラトーンの原則は市民の天性に應じて彼等に任務を授けると云ふことであつた。天性は凡てを爲し得、又凡てを爲す。びつこは身體の訓練に不適當であり、びつこの精神は精神の訓練に不適當である。私生兒や俗人は哲學をやる資格がない。吾吾が惡い靴下を穿いて居る人間を見るとき、彼が靴下屋ならば其れは不思議でないと云ふ。同樣に醫者が他のものよりも不養生であること、神學者が他のものよりも不良であること、學者は通例他の者よりも無能であることは經驗が屢々吾々に敎へる所である。昔アリストー・キウス[註一] Aristo Chius が哲學者は其の聽講者に害を與へると主張したのは正しい。何んとなれば大抵の精神は斯かる敎授から益を引き出すだけの力がないからである。斯かる敎授は

善を爲さないならば惡を爲す——ἀσώτους ex Aristippi, acerbos ex Zenonis schola exire.[註二] (アリスチッポスの學校からは放蕩者が出たし、ッェノンの學校からは野蠻人が出た)。

註一　紀元前二三〇頃散策學派の學頭となつた哲學者。

註二　Cicero—De Natura Deorum, III, 31.

(一二) クセノフォン[註一] Xenophon がペルシャ人に歸して居る所の其教育法の中に、他の國民が其の子供に學問を敎ふる如く、ペルシャ人は其の子供に道德を敎へるとあるが、之れは大いに推奬すべき事である。プラトーンは王家の長子にして玉座を繼承すべきものは次の樣に敎育せられたと云つて居る——彼の出生の後、人々は之れを婦人達に任かさずして高德の故に王の周圍に最大の權勢を有せる宦官達に之れを委ねた。此等の者は彼の身體を美はしく、健やかにすることを努め、又七歳後は馬に騎り、狩を行ふことを指導した。彼が十四歳になると、彼等は之れを他の四人の人卽ち全國民中最も賢明なる人、最も正直なる人、最も節制ある人、最も勇氣ある人の手に委ねた。第一の人は神神を敬ふことを、第二の人は常に信實であることを、第三の

人は情欲の主となることを、第四の人は何物をも恐れないことを彼に教へた。

註一　Xenophon (449—359 B.C.) アテネの歴史家にして將軍、ソクラテスの門人。彼が統帥した「一萬騎」遠征隊退軍の次第を記錄したものが有名なる Anabasis の著である。

(一三)　リコルゴス[註一] Lycurgus のあの卓越せる法典は實に驚くべく完全なるものであるが、其中には少年の體育が恰も其の主要事項であるかの如く、甚深の注意を以て取扱はれて居り、學問の修業に就いては、かのミューズの神々の住所に於いて、尚且殆んど何事も記されて居ないのは大いに注目に値する事であると思ふ。恰も道德以外の有らゆる束縛を蔑視した此等の高邁なる少年達は、吾々の場合に於ける學問の教師の代りに、たゞ勇氣、思慮、正義の教師のみを與へられたかのやうに見える。プラトーンは其の「國憲篇」に於いて此例に從つた。彼等の訓練の課題は先づ或る人物並に其の行爲に關して彼等が如何に判斷するやが質問せられ、彼等が某の人物、某の行爲を或は非難し或は賞讃するならば、更に其の理由如何を論明しなければならないと云ふ事であつた。斯かる方法に依つて彼等は互に判斷力

を鋭敏ならしめ、正義の何たるやを學んだ。アスチアゲス Astiages はキロス Cyrus の許に於いてクセノフォンに、彼の最終の學校時代の話をして呉れと賴んだ。クセノフォンは語つた「吾々の學校に大きな子供が居たが、其の外套は小さかつたから、彼は之れを彼の同級生でもつと小作りの子供にやつて、其の代りに其子供のでもつと大きかつた外套を取り上げた。吾々の敎師は私を此爭ひの裁判官にした。實は双方共此の方が好都合らしいから、結局事態は現狀の儘にして置かねばならぬと私は裁斷した。彼は此判決が不當であると云つて私を非難した。其の理由とする所に依れば私はたゞ双方の都合を考へるに止まつた。然し裁判官は第一に正義を證明すべきであつた。而して正義は何人も彼れに屬する所のものを侵害してはならない事を要求すると云ふのであつた」と。尙彼は此の爲に、恰も吾々が tuttto[註二] の最初の上過去變化を忘れた際に吾々の學校で懲らされる樣に、散々に懲らされたと語つた。私の中學敎師[註三]は私に一つの立派な辯論を in genere demonstrativo[註三] 聞かせて呉れて、然る後、彼の學校がこれ位價値のある所だと云ふことを私に納得させて呉れた。彼等は正しい道を切り開かうとして居た。而して斯樣に學問は、縱令之れを正し

く學んでも、精々で思慮や正直や果斷を教へるに過ぎないから、彼等は彼等の子供をして其の入學の最初から固有の成果を收めしめようとした。彼等の傾聽に依つてゞはなく、獨立な試行其ものに依つて、單に說教や言葉だけではなく、主として實例や作業に依つて、彼等を形成し、陶冶せんとした。其の標的は單なる知識でなくして、性格であり、習性であつた。收得にあらずして、本來の所有であつた。此れと同じ趣意であるが、アゲシラオスは、子供等は如何なるものを學ぶがよいかと問はれた時、答へた「彼等が成人になつた時にも爲さなければならない所のもの」と。此の如き教育が驚嘆すべき結果を生み出したことは不思議ではない。

註一　スパルタの立法者。半ば傳說的の人物であつて其生死年代は明かでない。

註二　「私が打ち懲らす」の意

註三　「頌讃(或は誹謗)を主眼とする論辯法で」の意

(一四)　傳ふる所に依れば人々は修辭學者や畫家や音樂家は之れをギリシャの他の都市で探したが、立法家や將軍は之れをスパルタに求めた。人々はアテネに於いては能

く語ることを、スパルタに於いては能く行ふことを、彼處では詭辯の係蹄を逃れ、巧に縺れ合はされたる言葉の詐術を打ち拉ぐことを、此處では歡樂の誘惑を却け、偉大なる勇氣を以て運命や死の恐怖に打ち勝つことを學んだ、彼方なる人々は言葉の問題に躊躇し、此方なる人々は行爲が其の關心事であつた。彼れは口舌の不斷の練習であり、此れは精神の不斷の練習であつた。さればアンチパーテル[註一] Antipater が彼等に五十人の子供を人質として要求した時、彼等は、吾々とは反對に、寧ろ其の二倍の成人をやり度いと答へたことは不思議ではない。彼等はそれ程祖國の教育上の

損失を恐れたのである。アゲシラオスがクセノフォンに子供を教育するならば須く彼等をスパルタに送るべしと勸告した時、それは其處で彼等が修辭學や辯證法を學ぶ爲ではなく、(彼が云つた如く)「最も高尚なる術、服從並に命令の術」を學ぶ爲であつた。ソクラテスが彼獨特の方法でヒッピアス Hippias を愚弄したのは實に痛快な話である——ヒッピアスはソクラテスに向つて、殊にシシリーの或る市市では教授に依つて莫大の金を儲けたがスパルタでは一文も儲からなかつたとか、測量や計算の法も知らず、文法や韻律も尊敬せず、たゞ歴代國王の名前や國家の建設や滅亡

其他同様のがらくたを知つて喜んで居る者は馬鹿だとか云ふ。彼等の談話の終りに於いてソクラテスはスパルタの政體の優秀なること、其の人民の私的生活の幸福にして有德なることを、ヒッピアスの口から一歩々々告白せざるを得ない様にする。而して遂に彼をして彼の術の無用であると云ふ結論に到達せしめて居る。

註一　アレキサンダー並に其父フィリップの將軍。紀元前三三一年、アギス王に率ゐられたるスパルタ軍を撃ち破つた。

（一五）此尙武の國家並に其他同様の國家の實例は、學問の研究が國民の元氣を旺盛ならしめ、惡戰苦鬪に堪ふるものたらしめずして、寧ろ之れを沮喪せしめ、銷沈せしめることを吾々に教へる。現今世界最强の國家はトルコであるが、其國民は武藝を尙んで學問を蔑視して居る。ローマは學問の未だ開けなかつた時に於いて一層勇敢であつた。現代に於いても最も好戰的なる國民は最も野蠻蒙昧なるものである。スキチア人[註一] les Scythes 然り、バルチア人[註二] les Parthes 然り、タメルラン[註三] Tamburlan, Tamerlan 然り。此等のものは何よりの證據である。ゴート人 les Gots がギリシヤを荒し廻つた時、其の圖書館を兵火より救つたものは彼

等の一人のもち出した次の意見であつた――「此道具は壞さないで敵に殘して置かねばならない。敵に軍隊的訓練を嫌がらせて、怠惰な座業に耽らしめるには恰好のものだ」。吾々の王シャール七世が殆んど劒の鞘を拂はずして、ネーブル王國並にトスカナの一部を屈服せしめた時、王の麾下の士は、此征服の意外に容易なりしは全く伊太利の王侯貴族の連中が勇敢にしてよく戰ふよりも寧ろ多才博學ならん事を願うた結果であるとした。

註一

Scythia はカルパシア山脈とコーカサス山脈との間に横る歐洲東南部一帶を古代ギリシャ人が呼んだ名前である。其人民は遊牧の民で、車の中に住み、專ら騎馬で戰つた。

註二

Parthia は古代アジア、裏海の東南に位した國であつた。始めペルシャに隷屬したが、アレキサンダーの征服後、彼並に其の後繼者に臣屬した。紀元前二五〇年頃獨立國となり、次第に領域を擴めてエウフラテス河からインドス河に及んだ。紀元前一世紀の中葉よりローマの强敵となり、兩者の間に屢々激戰が行はれた。其軍隊の主力は射術に長けた輕騎兵であつて、伴つて退却すると見せて、追擊し來る敵に矢を後ろ樣に射かけるのが其の得意の戰術であつた。

註三

Tamerlan 或は又 Timur Beg (1336—1405) は東洋史に「帖木兒（チムール）」とし

て現はれて居る英雄、帖木兒帝國の始祖。

兒童教育論 終

昭和三年九月一日印刷
昭和三年九月五日發行

兒童教育論
定價金貳圓

著作者　辻幸三郎
東京市京橋區南傳馬町二丁目五番地

發行者　目黑甚七
東京市牛込區市谷加賀町一丁目一二番地

印刷者　根本力三

印刷所　株式會社秀英舍

著作權所有

教育思想精華選
（7）

發行所
東京市京橋區南傳馬町二丁目
新潟縣長岡市表町四丁目（本店）
新潟市古町通七番町（支店）
目黑書店
（東京）電話京橋四二七番　振替口座三〇九番
（岡長）電話長岡一八番　振替口座三六一九番
（新潟）電話新潟九〇三番　振替長野四〇九〇番

259
S
62

370.8
Ky 9

3 年 11 月 22 日

156

終